

## 馬・牛・鶏

馬がない。インドネシア語のことわざの中でのことである。亜細亜大学におかれている外国語十三カ国語の先生たちで、それぞれの言語におけることわざの中に現れた動物をめぐる比較研究を進めている。

ことわざは庶民の生活感覚に育まれただけに、日常生活の原風景を描き出している。動物の中でも生活に密着している家畜の存在が最も大きい。インドネシア語のことわざに登場する馬は、その数がごく限られている。稲作農耕を生業とするインドネシアとは対照的な遊牧のモンゴルでは、馬がことわざの王座をしめているが、インドネシアでは、得体の知れない「馬の骨」程度の地位である。インドネシアの馬は口



バを少し大きくした小型の馬が主流で、もっぱら人を運ぶ馬車として利用されるに過ぎない。それに代わって活躍するのが牛で、中でも水牛が最も貴重である。

水牛は、湾曲した角のある恐い顔とは逆に、性格は従順で、働き者である。平たい蹄が水田の泥の中を歩くのに適し、生きたトラクターとして農作業には欠かせない存在である。水牛のお守りは子供達の仕事で、夕焼けの中を小さな男の子が牛の背に乗って、家路をたどる光景は実にのどかである。

水牛は農耕や運搬用の役牛としてばかりでなく、慶事に、あるいは葬儀に供儀用の肉として重要な価値を持っている。南スラウエシのトラジャでは葬儀に多数の水牛が犠牲として供せられ、切り取った角が「富と権力」の象徴として家の棟持柱に飾られる。

牛に劣らず、鶏にも多くのことわざがある。牛と鶏が上位の一、二を競い合っている。鶏といつても多くはシャモで、愛玩用として飼育されている。都会の金持ちの家では立派な鳥籠で飼われている。インドネシアの朝はけたたましい鶏の鳴き声とイスラムの礼拝を呼び掛けるアザーンで明ける。神々の鳥として有名なバリ島では、独特のバリ・ヒンドウの祭事の一つとして、今も闘鶏が盛んである。鶏は繁栄のシンボルとして日常生活の中で息づいている。

インドネシアと気候風土で対極にあるモンゴルでは、ことわざに鶏が不在である。たとえ同じように存在する動物でも、ことわざにこめられたイメージは、異なっている。ことわざを切り口に文化という民族的特性の一端がうかがえる。

(国際関係学部教授・高殿良博)

## アジア研究所だより

### ★第二十三回公開講座の開催

「イラク後の朝鮮半島 東アジアの新局面を探る」をテーマとして、六月七日より毎週土曜日(午後二時～四時)に公開講座を開催いたします。

六月七日、「盧武鉉政権の登場と南北関係」、野副伸一(亜細亜大学アジア研究所教授)

六月十四日、「胡锦涛と盧武鉉・金正日」中国と南北朝鮮との関係の行方、朱建榮(東洋学園大学人文学部教授)

六月二十一日、「北朝鮮の核・ミサイル開発」、恵谷治(ジャーナリスト)

六月二十八日、「主体性なき日本の朝鮮半島政策」、佐藤勝巳(北朝鮮に拉致された日本人を救出するための全国協議会会長)

七月五日、「プッシュ政権と東アジア」、友田錫(亜細亜大学アジア研究所所長)

受講料・三、〇〇〇円(全五回一括)は、郵便振替にて、亜細亜大学アジア研究所〇〇一〇〇六 五九七二一へお振込み下さい。振込み時の「受領証」と引換えに受付にて「受講証」をお渡し致します。

問い合わせ先・亜細亜大学学務課、〇四二二二 三六 三三八三

訂正とお詫び

第一〇九号(平成十五年一月三十一日)の「盧武鉉韓国新大統領の登場と韓米関係の亀裂」の執筆者の名前は、はなぶさゆきおでした。訂正しお詫び致します。